

2023 年度国内研究員報告書

油絵学科油絵研究室 袴田京太郎

研究期間 2023 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日

研究概要

今回の研究は「彫刻の空洞と沖縄の空洞」というテーマで、作品制作および発表を中心としながら、並行して沖縄のリサーチ研究を行った。私が近年テーマとしている「空洞」というのは、彫刻の见えない内部空間を起点にした概念で、私たちがずっと見て見ぬふりをしてきたネガティブなものであり、同時にそれなしでは成立し得ないような本質的なものでもある。そしてそれは、彫刻の問題に留まらず、さまざまなものの存在に共通しているものだと思う。

沖縄は太平洋戦争末期に国内で唯一の地上戦が行われたところで、島民の4分の1が犠牲になるという甚大な被害があった場所である。それにも関わらず、日本の国土の0.6%でしかないその場所に、いまだに在日アメリカ軍基地の7割が集中しているという現状がある。琉球文明から伝わる独自の風土の残る場所であり、日本の終わらない戦後の「空洞」でもある沖縄のリサーチは、本土に住む「加害者」としての自分自身が、作品制作を続けていく上で必要不可欠なことだと考えている。

まず作品制作／発表については、2023 年 3 月から 5 月末まで、「複製する（陰の彫刻）」というタイトルで、富山県美術館の TAD ギャラリーで個展、および公開制作、ワークショップをおこなった。また、それらの内容をまとめた記録冊子を 9 月に出版した。その後、10 月に群馬県のアーツ前橋の 10 周年記念展「ニューホライズン」に参加し、また 9 月に大阪のアートコートギャラリーで「陰の彫刻」というタイトルで個展を開催した。ここでの発表が私の現在進行形の「空洞」についての考えを具現化したもので、今回の国内研究の中間報告的な内容になっている。その後、富山県美術館で行った公開制作の関連で「本保裸婦像－複製」と題したアクリル板による等身大の作品を制作し、2024 年 3 月に富山県美術館に収蔵された。

沖縄のリサーチに関して、前半は琉球文明の発祥にまつわる「御嶽／うたき」（土着信仰の聖地のような）を中心にリサーチを行い、6 月と 12 月に、計 1 ヶ月の滞在で久高島のクボー御嶽、沖縄本島最北端、辺戸の安須森（アスムイ）御嶽など琉球文明発祥に関わる「琉球七嶽」をはじめ、主要な御嶽にはほぼ訪れることができた。日程の後半には主に沖縄戦の記録のリサーチを行い、平和祈念資料館をはじめ沖縄各地の資料館や、ガマと呼ばれる自然壕で実際に沖縄戦で多くの方が米軍の攻撃や集団自決によって亡くなった戦争遺構の調査研究を行った。言うまでもなく沖縄戦の歴史は、安易に言葉で語ることができないほど重大なもので、今回の調査で実際にその場に立ち、現場で多くの時

間を過ごすことで、沖縄戦というものが、目を背けて語りえぬものではなく、自分自身の問題として向き合うべきものであるとはっきり自覚するようになった。

しかし私の制作における空洞と、沖縄の空洞の問題は、自分自身の中では密接な関係があるものの、安易にその関係性を語るべきものではない、と感じたことも事実である。それに関しては今後もその関係性を探っていきたい。また今回の調査では当初想定していた「空洞としての沖縄アメリカ軍基地」よりも過去の沖縄戦の記録の調査を優先した。現在進行形の沖縄アメリカ軍基地の問題には引き続き注視し、情報を収集しつつ今後もリサーチなどを行ないたい。

もうひとつの調査研究として「彫刻の空洞」に関するリサーチために11月にイタリアのローマ、フィレンツェ、パドヴァ、フランスのヴァンスなどに約3週間滞在した。イタリア・ルネッサンス創世記の画家ジオット、ルネッサンスの大彫刻家ミケランジェロ、バロック期を代表する彫刻家ベルニーニ、さらにフランスのヴァンスでマティス最晩年の傑作「ロザリオ礼拝堂」を実見した。これらの作品群のほとんどは空間と一体化した「場」としての表現であり、「彫刻の空洞」を考える上でこれらの作品群を現地で体感したことで、今後の制作に直結する貴重な知見を得ることができた。

来年の6月に、今回の沖縄のリサーチに協力していただいた沖縄県立芸術大学で、私の現在進行形の沖縄に関する考えをかたちにした、個展とレクチャーを開催する予定である。これは大阪のアートコートギャラリーでの「彫刻の空洞」に関する中間報告的な個展に続き、主に沖縄の調査研究に関する現時点での報告的な内容になる予定である。

研究内容まとめ

1. 作品制作と発表

- 個展「アーティスト@TAD 袴田京太郎 複製する（陰の彫刻）」富山県美術館
- グループ展「みまちがう水」MA2 Gallery
- 展覧会監修「若林奮 森のはずれ」 武蔵野美術大学美術館・図書館
- 個展「袴田京太郎 陰の彫刻 」アートコートギャラリー
- 出版 アーティスト@TAD 袴田京太郎 複製する（陰の彫刻）記録冊子
- 作品制作・収蔵「本保裸婦像-複製」富山県美術館
- グループ展「アーツ前橋開館 10 周年記念展 ニューホライズン 歴史から未来へ」

2. 調査研究／沖縄

- 沖縄戦の戦争遺構・資料館等
 - ・ひめゆりの塔・ひめゆり平和祈念資料館
 - ・平和祈念公園・平和の礎
 - ・チビチリガマ
 - ・チビチリガマの 12 体の野仏
 - ・シムクガマ
 - ・沖縄陸軍病院 南風原壕群 20 号
 - ・糸数アブチラガマ
- 沖縄・琉球文化の聖地
 - ・琉球七嶽

3. 調査研究／イタリア・フランス

- ・ジオット（スクロヴェーニ礼拝堂ほか）
- ・ミケランジェロ（ロンダニーニのピエタほか）
- ・ベルニーニ（聖テレジアの法悦ほか）
- ・マティス（ロザリオ教会）

1. 作品制作と発表

●個展 「アーティスト@TAD 袴田京太郎 複製する（陰の彫刻）」富山県美術館

2023年3月19日～5月28日（2022年度からの継続）

TAD ギャラリーでの個展、公開制作、ワークショップ、トークイベントなど複合的な企画として開催。



TAD ギャラリーでの個展 「立つ女－複製 1、2」2016 年、「中国の老人－Scatter」「侍女－Scatter」「裸の 2 人の女－Scatter」2009 年 他 Scatter シリーズ 7 点、その他「布袋と台座－複製 1、2」2012 年など 計 16 点を展示。



「本保裸婦像－複製」2023 年 2 階ホワイエでの公開制作 富山県美所蔵の本保儀太郎作の裸婦像を 3D スキャンで 10 倍に拡大し、発泡スチロールとスタイロフォームの積層で制作し、そのプロセスを公開した。（高さ 380cm）

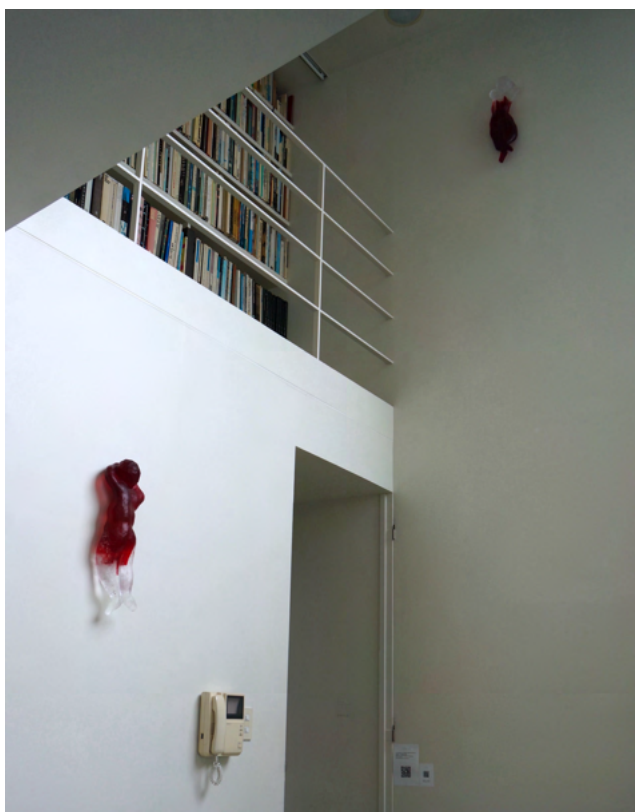


からだにことばをきざむ（作品体験） 既成のソファの肘掛けをアクリル板で複製したものに日本語と韓国・朝鮮語を浮き彫りにし、そこに腕を押し付けてことばの痕を残す作品。「刻印の肘掛ー忘れちゃった」「刻印の肘掛ー知らなかった」「刻印の肘掛ーどうでもいい」「刻印の踏み絵ーしょうがない」「刻印の踏み絵ーわからない」5点による作品体験とレクチャー。その後、5点の作品と共に記録展示を行う。

※ その他の関連企画として、ワークショップ「美術館の絵を複製する」、トークイベント「袴田京太郎×横山由季子（東京国立近代美術館研究員）」などを開催した。

●グループ展「みまちがう水」5月17日- 6月10日 MA2 Gallery（東京）

大西伸明、関根直子、保井智貴、袴田、によるグループ展。



「血と水1」「血と水2」アクリル板 2023年

●展覧会監修 「若林奮 森のはずれ」 武蔵野美術大学美術館・図書館 6月1日- 8月13日

(伊藤誠教授、戸田裕介教授との共同監修)

本学にも関わりの深い戦後の日本を代表する彫刻家若林奮の没後 20 年となる展覧会。「振動尺 I ～IV」、「Daisy I -A～J」などと共に、幻の代表作と言われた「森のはずれ」を 30 年ぶりに展示。展示構成は主に袴田が担当した。

関連イベントとして7月1日に生前の若林と親交が深かった詩人の吉増剛造氏と袴田とのトークイベントを開催。

(本学美術館・図書館 WEB サイト、YouTube にて記録を公開)

また同展カタログに、テキスト「若林さんの実物大の箱」を執筆。



「森のはずれ」 若林奮 1984 年

●個展「袴田京太郎 陰の彫刻」アートコートギャラリー（大阪）9月16日- 10月14日

「ザンダー」カーテン、ジェスモナイト、アクリル板、他 2023 年、「闘う女の子、怒る」アクリル板 2023 年、「俺の貧しいことばーにんじん」インクジェットプリント 2023 年ほか 13 点を出展。展覧会初日に、福元崇志氏（国立国際美術館主任研究員）×袴田のトークイベントを開催。



「袴田京太郎 陰の彫刻」展示風景



「ザンダー」 2023 年

●出版 アーティスト@TAD 袴田京太郎 複製する（陰の彫刻）記録冊子 9 月 30 日発行

A5 版 カラー24 ページ+モノクロ 28 ページ 編集・発行 富山県美術館・袴田 執筆：横山由季子（東京国立近代美術館研究員）、以倉新（富山県美術館学芸課長）、袴田 デザイン：牧寿次郎



「袴田京太郎 複製する（陰の彫刻）」記録冊子 2023 年 9 月

●作品制作・収蔵「本保裸婦像-複製」 公開制作からの展開として同作品をアクリル板によって等身大で制作した。



「コレクション展Ⅱ」 富山県美術館 2024 年 7 月～9 月

●グループ展「アーツ前橋開館 10 周年記念展 ニューホライズン 歴史から未来へ」

10 月 14 日－2024 年 2 月 12 日 アーツ前橋と前橋市中心市街地

オラファー・エリアソン、ジェームズ・タレル、蔡國強、五木田智央、袴田、他、29 組の作家が参加。

「Family Sticks」アクリル板（8 点組）2008 年、「ジュリアン－ Scatter」アクリル板 2013－2023 年 2 作品を出展。



Arts Maebashi 10th Anniversary Exhibition
アーツ前橋 開館10周年記念展

New Horizon: ニュー
Vision of ホライズン
the Future 歴史から未来へ

2023.10.14 [Sat] —
2024.2.12 [Mon, holiday]
Arts Maebashi and
Various Facilities around the City
アーツ前橋と前橋市中心市街地

「ニューホライズン 歴史から未来へ」チラシ



「ジュリアン－Scatter 2nd stage 」2013－2023 年



「Family Sticks」8 点組 2008 年

2. 調査研究／沖縄

滞在期間：1 回目 2023 年 6 月 15 日～27 日

2 回目 2023 年 12 月 18 日～28 日

●沖縄戦の戦争遺構・資料館等



●ひめゆりの塔・ひめゆり平和祈念資料館（糸満市）「ひめゆり」とは沖縄師範学校女子部、沖縄県立第一高等女子学校ふたつの学校の愛称。1945 年、沖縄戦で劣悪な環境の陸軍病院などに動員され怪我人の看護などにあたる。生徒・教師 240 名のうち 136 名が死亡。館では犠牲者全員の顔や氏名を公開し、若い女性たちが経験した逃げ場のない地獄を体感する。傷に湧く蛆虫、血と体液が混じった飲み水、四肢切断手術など、人間の尊厳が奪われていった克明な記録に溢れている。



●平和祈念公園・平和の礎（糸満市） 沖縄戦で亡くなったすべての方の名を刻した慰霊の碑。漠然とした「戦争／平和」という概念ではなく、20 万人を越える戦没者ひとりひとりの名前が生きた証として、ここを訪れる人に語りかける。



●チビチリガマ（読谷村） 左の碑に被害者全員の名前、中央にガマ、右が彫刻家金城実氏による「世代を結ぶ平和の像」。沖縄戦アメリカ軍上陸直後の1945年4月、ここに避難していた140名中83～85名の方が集団自決で亡くなった。亡くなった過半数が子供だったこと、家族や身内が殺し合ったあまりの凄惨な状況から、長く封印され忘れられた場所になっていた。1983年ごろの調査で世に知られるようになり、現在は沖縄戦を象徴する最も重要な慰霊の場所になっている。



●チビチリガマの野仏 チビチリガマが慰霊の場所になって以降、2回の破壊事件に見舞われている。ひとつは1987年に沖縄国体で日の丸を燃やした事件の報復として右翼団員によって「世代を結ぶ平和の像」が破壊された（数年後に修復）。もうひとつは2017年に沖縄の10代の少年4人が、肝試しの目的でガマ内部を荒らした事件である。この事件は戦後教育や失業率といった現代の沖縄の問題と複雑に関係したもので沖縄社会に衝撃を与えた。その少年らの更生を目的として、平和の像の作者である金城実氏の指導でコンクリート製の野仏が制作され、うち12体がチビチリガマ周辺に建立された。（この出来事に私は大変興味を持ち、今後、金城さんへの聞き取りを行い、これをテーマとした作品を構想中である。）



●シムクガマ（読谷村） チビチリガマから数百メートルの場所にあるガマだが、ここでは1000人近い人が避難していたにもかかわらず、集団自決は起こらなかった。その理由は、ハワイからの帰国者2名が「アメリカ軍は民間人の捕虜を殺さない」と投降を呼びかけたことに寄るといふ。同じ地域のこれほど近い場所で、情報や知識があるかないかで生死を分けたことは、チビチリガマの集団自決が軍国教育による洗脳や軍の強制によって起きたということを如実に示している。



●沖縄陸軍病院 南風原壕群 20 号（南風原町）

沖縄陸軍病院は1944年に熊本で編成され、その後、那覇市内で活動を始めたが戦禍により数ヶ月で消失し、その機能を南風原町に移転。翌年、約30基の横穴壕がつくられた。現在見学対象となっているのはその第20号。ひめゆり学徒なども動員されたが、十分な薬剤や治療器具もなく、生活空間と病室と死体置き場が地続きの状態であった。沖縄戦末期の1945年5月に重症患者に青酸カリを配るなどして自決を強要し、閉鎖、撤退した。



●糸数アブチラガマ（南城市）

沖縄戦で日本軍の地下陣地、倉庫として使用され、末期には南風原陸軍病院の分室として使用された自然洞窟。ひめゆり学徒の一部もここに動員された。貴重な戦争遺構としてガンドツアーによる見学を随時行っている。

●沖縄・琉球文化の聖地

●琉球七嶽（琉球の創世神アマミキヨが最初に作ったとされる7つの御嶽） 沖縄の聖地である御嶽は、沖縄戦時に避難所として使われた自然壕（ガマ）と共通点が多い。それぞれ、現在、立ち入りが禁じられている場所（空洞）があることなども含め、それらを比較しながら検証することで、多角的に沖縄への理解を深めたいと考えた。



1. 安須森御嶽（辺戸）

沖縄本島最北端にある琉球7嶽の1番目。



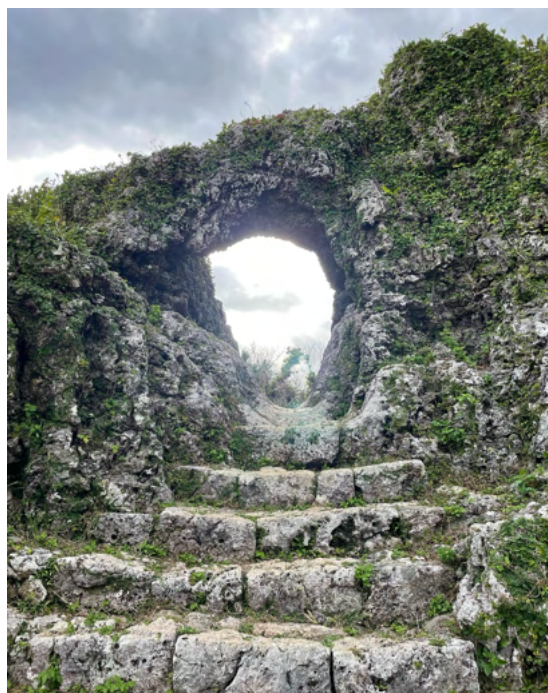
2. 金比屋武（今帰仁）

今帰仁城址内にある2番目の御嶽。



3. 斎場御嶽（南城市知念）

沖縄随一の聖地とされ世界遺産になっている。



4. 知念グスク（南城市玉城）

斎場御嶽と共に3番目につくられた御嶽。



5. 藪薩の浦原（南城市玉城）

周囲のヤハラヅカサ、浜川御嶽、受水走水、北方のミントングスク付近の海岸含めた地域の総称。



6. クボー御嶽（南城市久高島）（立ち入り禁止 写真は入り口付近）

6 番目につくられた久高島で最も神聖な御嶽。女性のみによる伝説の儀式イザイホーでも重要な場となる。



7. 首里森御嶽・真玉森御嶽（那覇市首里城内）（再建）

琉球七嶽として最後につくられた。首里城内 10 ヶ所の拝所の中で最も神聖な御嶽。城の守護神でもあった。

3. 調査研究／イタリア・フランス

滞在期間 10月26日～11月11日

国内研修のテーマでもあり、私の制作の重要な概念である「彫刻の空洞」に関するリサーチ。インスタレーションという形式のない時代、彫刻および絵画によってつくられた「特殊な場」としての表現を現地で体感することを目的とする。



● ジオット（アッシジ／サン・フランチェスコ聖堂）



● ジオット（パドヴァ／スクロヴェーニ礼拝堂）

過去に作品のモチーフとして何度も引用したジオット。彼の代表作がある2つの教会を初めて実見した。ずっと画集で見知ったはずの作品群だが、その素晴らしさと共に、改めてそれらが「場」として成立していることの重要性を体感した。

イタリア・ルネッサンスの先駆者として中世の様式的・図式的な絵画から、近世絵画の写実的な表現への革命的転換をもたらした「西洋近世絵画の父」としてのジョット。その揺るぎない評価とともに、かつてはミケランジェロやラファエロなどと比較して、「未熟」で「不完全」だという評価もあったという。それに対して近代以降には、ジョットの絵画の構造的な明晰さ、立体把握や平面性と奥行きの豊かさなどが「セザンヌに先駆する抽象的な知的造形家ジョット」という評価が主流となる。それらを踏まえても私が強く感じるのは、ジョットの絵の不完全さやユーモア、時にはバカバカしさとも見えるある種の「弱さ」である。それによって全方向に開かれた豊かで強靱な画面が、観る者を優しく迎えて入れてくれるのだと思う。



●ミケランジェロ ロンダニーニのピエタ
(スフォルツェスコ城 ミラノ)



●ミケランジェロ 囚われの人（奴隷）
(アカデミア美術館 フィレンツェ)

「ロンダニーニのピエタ」は30年前に観て以来、いまだに色褪せない特別な「わからなさ」を放射していた。この作品は、通称「未完のピエタ」とも言われるが、いわゆるキリストの悲劇を再現した「完成」とは、まったく別の方向に舵を切っているように思える。キリストの二重になった右腕、ごっそり削ぎ落とされてボリュームを失った顔面と胸部、何かをやりかけたようなマリアの背面の痕跡などを見れば、これが単なる「未完＝制作途中」ではない、と考えるのが妥当だろう。同じようなことがアカデミアの「囚われ人（奴隷）」からも感じられる。一見、岩から人のかたちを彫り出す途中のように見えるが、こちらも「完成」という状態からは大きく外れているように思える。人体のかたちもミケランジェロらしからぬ不自然さで、むしろ、ただ「岩が人になる瞬間」という「完成」を目指していたのかもしれない。それにしても表面の完成度が必須だったこの時代に、その中心にいたはずのミケランジェロが、完成ではない得体の知れない何かに向かって制作をしていたことにあらためて驚かされる。それはこの時代を圧倒する大彫刻家の戯れなのだろうか？ いや、そうではないだろう。「ロンダニーニのピエタ」を巡る混沌とした迷走の中で、死を目前にしたミケランジェロは未知の何かに出会ってしまった。それは言わば、人間の歴史上初めて「彫刻家」なる者が誕生した、ということなのかもしれない。



●ベルニーニ 聖テレジアの法悦

(サンタ・マリア・デッラ・ヴィットーリア教会 ローマ)



●ベルニーニ 福者ルドヴィーカ・アルベルトーニ

(サン・フランチェスコ・ア・リーパ教会 ローマ)

ベルニーニ作「聖テレジアの法悦」は、バロック彫刻の代表作であり、彫刻家なら誰でもひとこと言いたくなる「問題作」でもある。その構造は、壁に設置されることが前提のレリーフ的彫刻、ゆえに裏側は作品としては存在しない。それはレリーフゆえに重量から解放され、さらに劇的な演出を可能にしている。その華やかな舞台の上でテレジアの衣服のひだが暴走する。(覚醒した「アキラ」の鉄雄の身体のごとく)それはまるで「グシャグシャ」「ギラギラ」「ペロペロ」といった漫画のエフェクトのようでもある。身体のかたちを前提としない衣服、あるいは身体が爆発してかたちが拡散し放射している、それほどまでの激しい「法悦／エクスタシー」ということなのか。弛緩した手や足の断片がころうじてそこに身体がある(あった)ことを暗示させる。いかがわしい欲望による性的エクスタシーとも見えるテレジアの半開きの目と口。天使の薄ら笑い、意味深な矢。明らかなポルノに傾きそうになるところを、もはや身体ではない崩壊した何かが、別のリアリティに強引に引き戻す。



●マティス ロザリオ礼拝堂 (ヴァンス・フランス)



●ロザリオ礼拝堂内部(内部は撮影禁止のためネットの記事から引用)

病氣療養のためにフランスのニースに程近いヴァンスという小さな街に滞在していたマティスは、偶然、こじんまりした礼拝堂の制作に関わるようになった。彼は計画が進むにつれてその制作にのめり込み、結果的に内部の陶板壁画をはじめ、建物の設計、ステンドグラス、磔刑像、司祭の衣服に至るまですべての制作に関わった。礼拝堂としてはいささかエキセントリックであり、ローマやフィレンツェの大聖堂とは比べものにならないほど質素でささやかなこの礼拝堂。しかし隅々まで行き渡ったマティスの集大成ともいえるエッセンスは、静謐な祈りの場と軽やかな開放感という、相反するものを奇跡的に融合させている。この礼拝堂を「インスタレーション」と規定するとき、この場所は過去の遺物から未来へと開かれる。そうして歴史上のあらゆる教会や寺は「インスタレーション」と呼ぶことが可能になり、むしろどこへでも移動可能、単品で扱われる絵画や彫刻のほうが奇異なものに見えてくるだろう。この場所はジョットの礼拝堂とともに、美術作品における「場」について、あらゆる方面に多大な影響を与えるものである。